

# 星門巨

小説菅原道真青春譜

赤江 瀑



文春文庫



文春文庫

---

巨門星 小説菅原道真青春譜

定価はカバーに  
表示してあります

1990年6月10日 第1刷

著者 赤江 瀑

発行者 豊田 健次

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

---

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan  
ISBN4-16-728506-1

文 春 文 庫  
江苏工业学院图书馆

星 門 藏 書 章  
青春真道原營說

赤 江 瀑



目次

第一章 夢解の王

7

第二章 清涼殿の夜叉

53

第三章 梅華の変

108

第四章 春の冠り

188

第五章 花前暗淡

250

第六章 応天門の風

312

第七章 二人道真

385

第八章 有縁無情

444

あとがき

518

文庫版のためのあとがき

520



巨<sup>きよ</sup>

門<sup>もん</sup>

星<sup>せい</sup>

小説菅原道真青春譜



第一章 夢解ゆめときの王

承和十二（八四五）年の六月、夏越しの晦日みせかの祓はらいも間近なころの、ある暑熱日の昼さがりどき、都の町なか朱雀大路すざくおほじを南へむけて、二頭の駿馬しゅんめが走っていた。

先をゆく黒毛の主は三十四、五歳。一目で宮廷人とわかる、人品いやしからぬ風貌ふうぼう。後につづく連銭れんぜん葦毛あしげは、その従者か、十八、九にはなっていよう。見るからに血氣さかな、がっしりとした体軀たいくの若者だった。

馬足の速さにくらべて、どうかすると手綱さばきも危うげで心もとない黒毛の馬を、たえず巧みにやりすごし、追いつがりに、横に並び、うしろに退いたりして誘導し、操り助けて気づかいながら走っているのは、葦毛のほうだ。

「博士、七条を曲がりましたよう」

と、その若者が声をかける。

「おう」

と、黒毛の主も応じ、馬は西の市場のなかを砂塵さじんをまきあげて駆け抜ける。

大学少允しやういん、大学助、大内記を兼ね従五位下、つい先ごろの春文章博士もんじやうの栄職にまで昇った菅

原院の頭首、是善と、その門下生である。

「大丈夫ですか。一息いれてはいかがです」

「かまうな。駆れ。もっと駆れ。今日こそは、首尾よう本懷を遂げようぞ」

「はい。わたしも、そんな気がします」

「そうか。おまえも、そう思うか」

「はい。今朝方、矢羽の夢を見たのです」

「おお、矢羽をな」

「弓弦の音が、いまでも耳に残っています。健やかな、凜としたひびき音でした」

「そうか。それは幸先がよい。弦打は、初産湯には欠かせぬ習儀。読書の労も、わたしがとろう

ぞ。正夢となればよいが」

「なりますとも。わたくしには、三郎の殿だと思われます」

「おう。おまえも、男児と見立てるか」

「はい」

「それでよい。そうでなくてはならぬ。男児こそ、わが家の力。男児とこそ思うなれば、こうして馬で乗りつけるのだ。学儒、文林の道にも猛氣。一陣の豪風よ。文の家に生まれる子には、これからはなおのこと、この雄々しさが欠かせぬ大事。武でなく、剛。蛮でなく、勇。願わくば、その氣概を、わが子に授かりたいものよ」

黒毛の主は、もの穏やかな髭をたくわえた顔をあげ、夏の衣に風をはらませ、

「竜乙、つづけ。賑々しゅうに乗りつけようぞ」

と、一鞭大きく唸らせた。

二頭の騎馬は、うだるような道祖大路をやがて南へ、西の京を見るまにはずれ、田野のなかの草道へと走り去って行った。

後方には、丹塗りの大二重閣羅城門が、音もなく陽炎におしつつまれ、生きて動いているようだった。

その大門は、遙かに伴氏の邸からも望めた。

是善の妻の生家・伴氏の邸の者が、

「お腹いたがはじまりました。どうやら、本事のようにございます」

と、峠にさしかかったらしい陣痛をしらせてきたのは、最初の痛み走りから数えて三日目のことであつた。

三日三晩ひきもきらずの痛みで、産屋には、懷抱や腰抱の女房たちのほかに、護持僧、陰陽師、巫女などまでつめかけての、難産騒ぎである。

是善には三人目の子で、産穢の忌みをはばかり妻の望みもあって、上二人の子の出産同様、出向くことはひかえていたが、ことのほか手強い痛みといい、三日がかりの難産と聞くにつけ、落ち着かないのは親の常で、思わずあげた腰だった。

母体の安否も気にかかったが、しかし、母腹をそれほどまでに苦しめて生まれ出る子に、一方では、ふと奇妙な興趣も湧いたのである。

——強情な子め。手を焼かせる。

と、舌打ちしたい思いのなかに、平らかに生まれ出る子にはない、ふしぎな期待心が、つと芽ばえたりもするのであつた。

——気性さかんな心やも知れぬ。

父祖三代、學問で重きをなした家の血には、動よりは静、火よりは水に澄むという、濁りや波瀾に不向きな風が、抜きがたかった。

それを不満に思うのではなかったが、ことあらためてそんなことを、ふと是善は考えた。

考えるとにわかに、わけもなく、生まれ出てくる子の顔を、見たいという衝動にかられたのだ。

――変わり種やも知れぬ。

そう思った。

思うと、ふしぎに心がはずみ、苦しみの産座で妻を打ちひしんでいるものへ、末頼もしささえ感じるのであった。

勘解由小路南、烏丸西の菅原院から馬をとばした道のりは、走って見ればそう長くもなかったけれど、公私にわたって武ばった職務や暮らしに縁遠い是善には、身に馴れぬ振るまいで、いささか息切れもし、さすがに軽い疲れをおぼえた。

しかし、久し振りに、一汗かいたという日ごろ味わえない疲れの、新鮮さもあった。

伴氏の邸の門垣が、すぐ目と鼻の先に見える藪道に、さしかかったときであった。

竜乙が、急に馬の手綱を引き、

「あれは……」

と、不審げに、目顔でしらせた。

道べりの湧き水のある小藪の窪地に、女が一人うずくまっていた。

まるで破れ籠のようにほころび荒れた市女笠をかぶっている。

粗末な小袖も、いたみ放題いたんでいた。

女は、前かがみに軀を折り、なかば投げ出したけた足裏を見せて、地面にうつぶせている。

もう長いことわらじ一枚はいてはいまいと思われる、かちはだしであった。

「行き倒れでしょうか」

「旅の者のようだな」

かたわらの草地に、小振りな和琴<sup>わごん</sup>が一槽、放り出されて転がっている。

漂泊の妓女<sup>きじよ</sup>でもあろうか。

「難渋<sup>なんじゆ</sup>しているようだ。見てきなさい」

「はい」

馬をおりた竜乙は、しかしすぐにもどってきた。

「はらみ女<sup>はらみめ</sup>のようです」

「なに」

「苦しんでいます。あぶら汗を、しとどにかいて。もう産まれるのではないでしょうか」

「妊婦<sup>にぶ</sup>か」

「はい。そのようです」

「で、なんといっておる」

「なにも答えようとはしません。口もきけない様子です」

是善も、馬からおりた。

そういつているうちにも、女は身をうねらせて、地面に這<sup>は</sup>った。

声一つたてもせず、陽ざらしの路傍に身もがいている女の背が、ゆっくりと波打っている。ゆっくりとではあるけれど、はげしさを押し殺した動きであった。

痛苦の声を放つでもなく、ただ波打っている女の背は、波打てば波打つほど、逆に静けさを深

めるようで、奇妙にけものめいて見えた。

「このままにはしておけまい。とにかく、運びこみなさい」

「は？ お邸にですか？」

「そうだ」

「しかし……あちらも」

と、竜乙は、口ごもった。

「よろしいでしょうか」

「捨ててはおけまいが。さいわい、なかも出産騒ぎ。手も支度も揃っている。こうして、わたしたちが行きあわせたのも、なにかの縁だろう。よい。わたしが、家の者を呼ぼう。おまえは、手をかしてやりなさい」

是善は、そういうと、ふたたび馬に乗って、伴氏の門口へむかった。

穴だらけの市女笠からこぼれこむ陽ざしに透けて、化粧気も紅もない女の顔は、苦悶をきざんで疲れ果て、凄惨だったが、抱えあげると、竜乙の腕のなかで、ふとほのかに香の匂いがさまよいたった。

身なりにそぐわない、意外さだった。

琴を弾いて、その日暮らしの食を乞う放浪の旅芸人と思われたが、顔だちにも、そういえば、どこことなく気品があった。

女は、もう正体をなくしていた。

加持僧の唸りののしる護持経や、泣きじゃくりでもするような巫女の声が、邸の内外に満ち、介添え女や下働きの奴婢たちが、ときどき簀子縁へ出てきたり、庭先をよぎったりする。

出産は、まだ長引いているようだった。

脇門を入れて庭内へまわった竜乙には、奥の産屋の様子など推し量れようもない。

是善は、対屋の広庇ひろびしに立って、白綾の袷うちきをはおった乳母の女房と話しこんでいた。

「とんでもございません。これだけは、たとえ菅原院の殿のお言葉でも、お聞きするわけにはま  
いりません」

「では、このまま放り出せといわれるのか」

「おいじめにならないで下さいませ。いまでも申しましたように、合腹あいばらというて、一つ家の内、同じ屋根の下で、二つのお腹があうというのは、むかしから、なによりも忌み嫌われた不吉ごとなのですよ」

「だから、そこをなんとか、計ろうとくれと頼んでいるのだ」

「いいえ。お引受けできません。二人のお身重みもぢが、一つ家のなかでのご出産は、かならず、どちらかのお子がお育ちにはなりません。いえ、人の子ばかりではありませんのよ。屋敷内に犬、畜生が身ごもっていてさえ、産事には障りさわになるというくらいなのです。まして、平時の場合とちがって、時が時ではございませんか。ご無理をおっしゃらないで下さい」

「せめて庇なりと、貸してやることはできませんか」

「奥のお方は、いま生き死にの境い目を、さまようていらっしゃるのでございますよ。この宵内あたりまでに、お出にならなければ、母御のお軀のほうがつまいと、案じ暮れておりますのに」

乳母の女房は涙声になった。

「そんなに、ひどいか」

是善も、眉を曇らせた。

二人の話を洩れ聞きながら、市女笠の女を抱えて、庭先の竜乙は、その処置に困っていた。

あまりの苦痛のはげしさのためか、一潮すぎていまは小康を得てでもいるのか、女は汗と泥まみれの顔をのけぞらせ、正気を失ったままであった。

「あの女も、いま、同じ苦しみにつかまっているのだよ」

「お気の毒にはと思いますが、どうぞ、このことだけは、ごかんべんを」

乳母の女房もいたいたしげに、女の上に眼を投じた。

そこへ、「お腹いたがまりました」と、遣戸をあけて、家の女が走り出てきた。

「おお、おいたわしや。また地獄へお帰りか」

と、乳母の女房は顔をおおい、こけつまろびつの態で、奥へ駆けこんで行った。

菅原是善の第三子、幼名・阿古が産声をあげたのは、その日の夜も深く更けてからである。

もつとも、産声というにふさわしいあの不意の勝鬨にも似た、産屋の大気をきり裂いてはじけ、この世に躍り出たことを告げ知らせでもするような傍若無人な嬰兒の声を、耳にした者は誰もなかった。

阿古は、ほんの二声三声、か細く泣いたきりで、あとはただおぼろおぼろに口を開き、ときおり思い出したように、声にもならない息根の音を、嫋々とたてるだけであった。

「泣くわがさえ、忘れて生まれたか」

と、是善は慨嘆した。

触れればきゅっと握りしめるあのふくらかな拳の指も、まるでほどけきっていて、手足や首の動きにも、どこか呆けて力がなかった。

襦袢にくるんで寝かせておけば、いつまでも動かずにじっとしているような子だった。

初産湯の湯殿始に、漢籍の賀文辞の一節を読む読書の習わしも、めでたい縁起事としての形だけの儀式ではなく、学問の家である菅家では、学の氣に触れ、文の風に触れる、学問成就・繁栄を祈り、祝う、特別な、いわば学問始めの意味があった。

是善は、深夜の湯殿の南面に坐し、漢籍からは古文孝経の一節を選んで読み聞かせた。同時に、弓弦を鳴らして妖魔を払う鳴弦のしきたりも、手ずから授けた。

湯しずくをしたたらせて、女房たちの手で白無垢の産衣にとりあげられる嬰兒を前にしたとき、是善は、思わず、

(泣け)

と、心に念じた。

(泣いてみせる。それが、おまえの礼儀だぞ。祝意を受けた返礼を、返せ)

白衣のなかの嬰兒は、終始ひととも声をたてず、淡く口もとを開いたまま、眠り呆けてでもいるかに見えた。

(眼をきませ。まだ母の腹にでもいるつもりか)

是善は、にらみつけるように、まなじりを裂いた。

(いま泣かぬなら、それもよからう。だが、この先とも、決して泣くな。わたしは、それをゆるしはせぬぞ。泣かぬ子で、とおして見せるか)

是善が幻の声を聞いたのは、まさにそうした折であった。

幻か、そうでなければ、それは是善の心の声に応えて放った阿古の泣き声にちがいない、と是善は信じた。